

# 「きもの」の近代化と植民地主義 ～物質と表象、衣服と言葉～

森 理恵

## 1 はじめに

本稿の目的は、現代の日本における、いわゆる「きもの」、たとえば成人式や茶会などで見られるような現在の「きもの」と、その「きもの」に対する認識がどのようにして形成されてきたのかを考えることである。

現代日本において、いかなる過程を経て、「きもの」＝伝統、「洋服」＝近代、といった見方が成立したのか？ なぜ、「きものは日本の心をあらわす」などと言われることがあるのか？ 前近代の日本列島に居住していた多くの人々、とくに人口の大部分を占めていたとされる農民層は、現在の「きもの」の前身である長袖長着物とはほとんど無縁の生活をしてきた。現代の「きもの」は、江戸時代末期の武家階級や裕福な町人層の服飾を元にして、それらを近代化、「西洋化」させた服飾文化である<sup>1</sup>。

結論を先に述べると、私は、現在のような、日本性の象徴としての「きもの」のありかたは、19世紀末にジャポニズムのなかで誕生し、20世紀前半に日本の植民地主義をつうじて強化され、連合軍占領下の日本において定着し、今日のナショナリズムと「きもの」の結びつきにいたっているのではないかと考えている。

このことを証明するために、本稿では、近代日本の「きもの」をふたつの面からながめてみることにする。ひとつは、服装の一形態としての「きもの」の物質として、表象としてのありかたであり、もうひとつは、言葉としての「きもの」のありかたである。これらのことを、日本の近代におけるオリエンタリズム（ジャポニズム）と植民地主義の展開と照らし合わせてみていきたい。

## 2 服装の一形態としての「きもの」

現在の「きもの」は、明治末期から昭和の初めにおける和装産業と消費社会の発展のなかでつくり上げられたものである。当初は、その国内における製造と消費に限ってみれば、「きもの」は人々にとって、晴れ着であったり、ファッションナブルな街着であったり、日常着であったり、といったものであり、日本の象徴であるとか、「日本の心をあらわす」といった意識は薄かったと思われる。また、大正期から昭和初期には、一部の人々によってコスモポリタニズムとしての「きもの」の消費も実践されていた<sup>2</sup>。

しかしながら、日本の近代化、すなわち、日本の対外膨張政策や帝国主義、植民地主義のなかでながめてみると、「きもの」のまた違った側面がみえてくる。

### (1) 対西洋

19世紀末以来のジャポニズム、つまりオリエンタリズムのなかで、物質としての「きもの」は、古着として、あるいは欧米の需要に合わせて作られた商品として、日本から欧米市場へ売り出さ

れた<sup>3</sup>。また、いちいち例を挙げるまでもなく、日本を西洋に紹介しようとするときにはいつも、日本の女性と日本の「きもの」がセットで使われる<sup>4</sup>。物質としてよりもむしろ表象のなかで、「きもの」の女性性が強化されていくことに留意すべきであろう。占領下においても、物質としての「きもの」は占領軍兵士の人気お土産品であり<sup>5</sup>、「きもの」を着た女性は占領軍兵士を客とする店で働いた。

要するに、西洋に向けての「きもの」は、幕末から現代にいたるまで、物質としては有用な商品であり、表象としては日本への誘致のための便利なアイコンでありつづけている。物質としても表象としても、「きもの」は常に、外貨獲得のためのキー・アイテムなのである。

## (2) 対東洋

「きもの」は日本の植民地経営のなかでも重要な役割を果たしてきた。

軍人、兵士、商人、官吏といった日本の男性はアジアに、洋服を着てあらわれた。他のアジア諸国に対し優位な立場に立とうとするとき、日本服とはすなわち洋服だったのである。一方、性産業・接客業従事者や、日本人男性の妻などの被扶養者や、そのほかの日本の女性たちの多くは、アジアで「きもの」を着ていた。現代韓国では、植民地時代の日本の男性は洋服姿で、日本の女性は「きもの」姿で記憶されているという報告もある<sup>6</sup>。

アジアにおける物質としての「きもの」は、材料では、たとえば「羽二重」が朝鮮や中国に移出、輸出されて利益を上げたし、日本女性が移住した先へは反物が輸出された。接客業や性産業で働く女性たちの「きもの」もアジアの各地で需要があり、流通、販売されていた。

アジアにおける表象としての「きもの」はどうだろうか。日中戦争期までは、エキゾチシズムとして「きもの」の消費も見られるが、日中戦争期以降、「きもの」はしだいに「日本性」を強く帯び、総力戦への協力をうながしたり、同化を進めるアイテムとしての役割を果たすようになる<sup>7</sup>。台湾日日新聞には、台湾女性が「同化」した証として、「きもの」姿の台湾女性の写真が掲載されたという<sup>8</sup>。植民地末期の朝鮮の映画のなかでは、「きもの」姿の日本人女性は、主人公たちを助ける、やさしい存在として描かれている<sup>9</sup>。また、日本軍政下のインドネシアでは、「きもの」の表象が、日本文化への憧れを誘うものとして使われている。1942年6月28日の朝日新聞の記事では「日本着物に歓声ジャバの街」との見出しのもと、着物姿の日本女性一行を、「サロン」姿の人々が歓迎した」という記述が見られる。ジャワ新聞社が発行したグラフ誌『ジャワ・バル』では、「きもの」を着た日本女性やインドネシア女性、市松人形などの写真がしばしば登場し、「きもの」は剣道をする男性とともに、日本文化の表象としての役割を強く担っている<sup>10</sup>。

さらに、日本軍「慰安婦」を強制された方々の多くが、自身の民族性にかかわらず、アジアの各地で、日本風の名前と髪型と和服を強要されたと証言しておられることも忘れてはならない<sup>11</sup>。

アジアにおいても「きもの」は「女性」とセットになって、日本性をひろめるために活躍しているのである。

## 3 言葉としての「きもの」 ～朝日新聞縮刷版検索（1945年まで）より～

ところで本研究では、現代の和服の意味で「きもの」という言葉を使用しているが、現在これは、とくに珍しい言葉の使用法ではない。現代日本では、和服の意味でひらがな表記の「きもの」を使うことは、「きもの検定」など、いろいろなところでおこなわれている。それではいつご

ろから、この用語法ははじまったのか？ 以下に、1945年までの朝日新聞縮刷版の検索サービス<sup>12</sup>を利用して調べた結果をふまえて考察する。

#### (1) きもの

朝日新聞において、ひらがな表記の「きもの」という言葉の初出は意外に遅く、1923（大正12）年である。バラックで生まれる赤ちゃんへ、篤志家が「帽子ときもの」を贈ったという記事である。洋服を指すのか和服を指すのか不明であるが、帽子とともに贈られたとのことなので洋服の可能性が高いといえよう。

その次に「きもの」が出てくるのはその翌年、1924年のジョン・パリスの小説「きもの」の広告である。私は、洋服を含めて着る物全体ではなく、和服だけを「きもの」と呼ぶようになったのは、ジャポニズムに発する欧米での言葉の使用方法からの逆輸入ではないかと考えているが、ひらがなの「きもの」という言葉をはっきりと和服の意味で使っている初期の例がジャポニズム小説であるというのは興味深い事実である。

その後、1928年にもひらがなの「きもの」が見られるが、これはサンタクロースの服装の説明で「赤いきものに大きな袋」とあるので、これは明らかに洋服である。そして、1945年までの朝日新聞縮刷版の検索でひらがなの「きもの」表記が見られるのはあと一件、ジム・バリスト氏が日本を去る言葉としての「きものを捨てるな」で、これまた和服の意味での使用例は、西洋人からの言葉になっている。

1945年までの朝日新聞におけるひらがな表記の「きもの」は、戦前にはあまり見られず、洋服を指す場合もあり、和服を指す場合には、西洋人が使う言葉としてであった、ということができる。

#### (2) キモノ

カタカナ表記の「キモノ」は、こちらはひらがな表記の「きもの」より古く、1907年より見られる。しかも興味深いことに、カタカナの「キモノ」の使用される場面のほとんどは、外国人、主に西洋人が和服を着たり見たりした、という記事である。

初出は1907年の「日本大持て 巴里の新流行」で、パリで「キモノ」風のファッションが流行しているという報告である。1913年にも「欧米上流社会にキモノと手拭の流行」、などです。1934年には「銀座に異風景 キモノの米人」、そして敗戦直後の1945年9月12日には「キモノに集う米兵」という記事がみられる。

#### (3) 着物

漢字の「着物」はどうか。用例としては漢字の「着物」が圧倒的に多く、1945年までの朝日新聞では、和服洋服を問わず、たんなる「衣服」や「衣類」を指す場合には漢字表記の「着物」が使用されている。着物泥棒や着物に火が燃え移って火事、などの記事にはじまり、「オランダの着物を着た人形」、「アメリカでは赤ちゃんの着物を保健婦が指導している」といった明らかに洋服を指すものから、「着物の不調和を救う半襟」といった和服を指す記事までさまざまである。一面記事より三面記事や、洗濯方法など実用記事が多いのも、漢字の「着物」の特徴である。

#### (4) 和服

「和服」という言葉の初出は、1879年、「警察巡查に休日の和服の着用を許した」というものである。当然であるが、洋服と区別するために和服という言葉を用いているので、「洋服ではなく」

という意味で用いられている。そのほか、「女官の用服」など、制服として、洋服を着るべきところを和服でもよい、といった記事が明治の前半では目立つ。広告においては、「和服裁縫」や「和服洋服古着とりあつかい」といった例も頻出する。

また、重要な点として、次にみる「日本服」という言葉にも言えることであるが、対外関係、国際関係の記事においては、アジア関係では、「キモノ」よりも「和服」「日本服」という言葉が多く使われている。たとえば、朝鮮の開明派が日本に潜伏している等の記事で「和服散髪の姿となりて」のように書かれているし、アイヌ、琉球、台湾の人々が日本の衣服を着たというような場合にも「和服」または「日本服」という言葉を用いている。

さらに、日中戦争期になると、1932年の五・一五事件の犯人たちが「和服で晴れやかに 再び大津刑務所へ」、あるいは「和服姿で陸海軍大将の顔合わせ」といったように軍や政府の要人が「和服姿」で報道陣の前にあらわれた、という記事が散見されるようになる。男性が公の場で「和服」を着ることが日本の国威発揚につながる、といった論調が見られるようになるのが日中戦争期の特徴であるといえる。警官の制服が和服でもよいかどうかと議論していた明治期とは、まさに隔世の感がある。

#### (5) 日本服

「日本服」という言葉の用例は、「着物」や「和服」に比べて少数ではあるが、「和服」よりもいっそう、西洋というよりは東洋に対する場面で、「日本服」という言葉が使われる傾向が強くなっている。

なお、「日本服」については、それが何を指しているのかということについても留意する必要がある。1895年10月8日早朝の朝鮮王妃殺害事件に関する一連の報道において、朝日新聞は当初、韓国人の訓練兵が王妃を殺害したのだと事実とことなる報道をしている。そのなかで、兵士が日本服を着ていたとの情報に対し、10月11日の記事では「韓兵」が日本服を着ることにより日本人に扮して王宮に入り込んだのだと書き、15日の記事ではさらに、その兵士は王宮に入ってから韓服にあらためたのだと不可解なことを書いている。そしてついに、16日には、「訓練兵が日本服を着ていた」という「日本服」は実は洋服のことだとして、「ことさらに洋服などを着用し余は日本人なりと言わぬばかりにしていた」が「そのじつ韓人」であった、と強弁しているのである。

ただし、ここで洋服を日本服と言った、というのは事実を捻じ曲げるための方便である可能性が高いが、まったく奇想天外な方便というわけではないように思われる。かなり後の例になるが、1924年の朝日新聞の記事に、「在朝日本人の多くが洋服を着ているので、朝鮮では、洋服のことを日本服といい、日本服のことを和服と言っている」という記述が見られるからである。「朝鮮服」や「中国服」ではないという意味で、「日本服」という言葉が洋服の意味で使われていることは注目すべきである。

要するに、「日本服」は「朝鮮服」、「中国服」の反対語であり、「和服」は洋服の反対語なのである。「きもの」「キモノ」はさらに、「和服」のなかでも、西洋人からみた特別な「和服」を指している、というように整理することができる。外部に参照すべきものがあって、それとの対比で、自民族のアイデンティティをあらわす言葉が選ばれていることが、ここではっきりとわかる。

さらに、女性の和服を指す場合に、より多く「きもの」という言葉が使われ、男性の和服とい

う場合には、「きもの」よりも、「和服」「日本服」という言葉が選ばれる傾向もみられた。

西洋人が登場する場面で「きもの」という言葉を使うのは、「きもの」(kimono, quimono) という言葉が、外来語として実際に欧米で使われているからである。ただし、欧米語の「きもの」はあくまでもジャポニズムのなかの、西洋のステレオタイプのなかで「ゲイシャ」が着ているよう「きもの」であり、当時の日本で使われていた衣類一般を指す「着物」という言葉とは意味内容が違うことに気をつけなければならない。現在の日本で使われている「きもの」という言葉は、欧米語の「きもの」の意味内容に近づいているとも解釈できる。

#### 4 まとめ

以上のことから、ジャポニズム、植民地支配の進行、戦争の激化にともない、和服としての「きもの」は日本の風俗の一部から、「日本女性」や「日本精神」の象徴へと変化を遂げたことがわかった。こうした過程をとおして、「きもの」は女性化し、現在のような過剰な日本性の象徴としての「きもの」になったのではないかと考えられる。

「きもの」は、表象としては、日本性の象徴とされ、昨今ますます、「日本化」の度合いは強まっているといえる。しかしながら、それと反比例するかのよう、物質としての「きもの」は、近年どんどん脱日本化している。生産、つまり製糸から染織加工、縫製は現在、海外の工場での多くが行われており、今後ますますその度合いは高まると考えられる。製品は国際市場で流通し、国際的に消費されている。「日本」を表象しながら、物質としてはどんどん脱日本化している、これが現在の「きもの」の姿ではないだろうか。

#### 附記

本稿は、2012年2月18日に、文化ファッション研究機構の主催により、我々共同研究のメンバーで企画したシンポジウム『20世紀における「きもの」の国際化－日本化と脱日本化－』（東京都渋谷区、文化学園大学）で発表した内容に加筆修正したものである。多大なるご支援を賜りました文化ファッション研究機構に厚くお礼申し上げます。そして、共同研究をいっしょに進め、有益なアドバイスをたくさんいただき、楽しいディスカッションをたっぷりとさせていただいた、テリ・五月・ミルハプトさん、セーラ・フレデリックさん、鈴木桂子さんに心より感謝いたします。

---

1 森理恵「キモノの女性化、ファッション化と民族衣装化」、愛媛県歴史文化博物館展覧会図録『ときめくファッション～小町娘からモダンガールまで～』、2006年、114-119ページ参照。

2 本書所収セーラ・フレデリック論文参照。

3 深井晃子『ジャポニズムインファッション 海を渡ったキモノ』平凡社、1994年参照。

4 たとえば、1935年制作、1937年のパリ万博でグランプリを受賞したという文化映画「日本の花卉芸術」（京都府京都文化博物館・東京都江戸東京博物館・読売新聞社編集『特別展いけばな』2009年参照）、小磯良平が描き、1940年に発表した日本郵船の外国向け「客船三新姉妹船ポスター」（船の科学館編集『魅惑の船旅－ポスターに見る客船史－』1993年参照）、近年では、2006

---

年に国土交通省の米国向けビジット・ジャパン・キャンペーンに PUFFY が起用されたポスターなど。

5 本書所収の鈴木桂子論文「「きもの」文化が海外を廻る：輸出品、アロハ、スカジャンの一考察」参照。

6 岡田浩樹「白衣とチマ・チョゴリ」、鈴木清史・山本誠編『装いの人類学』、人文書院、1999年、83ページ。

7 詳しくは、本書所収の森理恵「日本統治下の朝鮮における「きもの」の表象 ～文学、映画から～」参照。

8 Dean Brink. "Pygmalion Colonialism: How to Become a Japanese Woman in Late Occupied Taiwan," *Sungyun Journal of East Asian Studies* 12:1 (2012):41-63.

9 『朝鮮海峡』朝鮮映画製作株式会社、1943年制作。Korean Film Archive. *The Past Unearthed: Collection of Feature Films in the Japanese Colonial Period*(2007) 参照。

10 倉沢愛子編『復刻版ジャワ・バル』龍溪書舎、1992年参照。

11 詳しくは、本書所収の森理恵「日本軍「慰安婦」証言集にみる「きもの」」参照。

12 朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル」利用。